

【命の大切さを学ばせる体験活動推進校】

命の大切さを学ばせる体験活動

周南市立湯野小学校

学校の概要

① 学校規模

- 学級数：7学級
- 児童数：77人
- 教職員数：11人
- 活動の対象学年：全学年・77人

② 体験活動の観点などからみた学校環境

- 湯野温泉を校区にもち、山や川にも恵まれ地域のあたたかさに包まれている。老人介護施設や老人病院が点在し、お年寄りとの交流も盛んである。
- 平成16・17年度の「心に響く道徳教育推進事業」、平成18年度「大人に学ぶ小学生サポートプラン」の山口県指定を受けて体験活動及び道徳教育を核とした教育活動を続けてきている。

③ 連絡先

- 〒745-1132
周南市大字湯野3843番地
- 電話：(0834)83-2025
電子メール：yunosjm@shunan.ed.jp

体験活動の概要

① 活動のねらい

- 自己肯定感をもって、よりよい生き方を実現しようとする意欲・態度の育成。
- 他の教科等との関連や日常生活とのつながりを通しての「ひとりだち（自立）」。
- コミュニケーション能力を高め、互いがかけがえのない一人であり、支え合って生きていること（共生）の実感。

② 活動内容と教育課程上の位置づけ

〈全校体制による活動から抜粋〉

- 日野原重明先生「いのちの授業」
(全校道徳1時間、国語1時間、学活1時間)
- サン・サンロードクリーン作戦
(特活2時間、道徳1時間)

〈学年の活動から抜粋〉

- 和牛農家の訪問（第1学年）
(生活17時間、道徳2時間)
- 生き物を極めよう（第4学年）
(総合的な学習27時間、学活4時間、道徳3時間)

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

- かけがえのない存在である自分自身を肯定し、一人ひとりがよりよい生き方を実現しようとする意欲・態度を育む。
- 体験活動と他の教科等との関連を図ったり、日常生活とつなげたりすることにより、「ひとりだち（自立）」をめざす。
- 体験活動の中で自分の思いを表現し合う場を設定してコミュニケーション力を高め、互いがかけがえのない一人であり、支え合って生きていること（共生）を実感させる。

(2) 全体の指導計画

① 全校体制による活動計画

学年	体 験 活 動	教育課程上の位置づけ
1	和牛農家の訪問、幼稚園との交流、サツマイモなどの栽培	生活、道徳、学活

2	成長の記録作り、幼稚園との交流、サツマイモ・野菜の栽培	生活、道徳、学活
3	高齢者、障害者との交流	総合的な学習、道徳
4	学校や地域の美化・栽培活動、飼育活動（ウサギ・鳥等）	総合的な学習、学活
5	飼育活動（メダカ）、竹炭作り、お仕事にチャレンジ	総合的な学習、学活
6	栽培活動（大豆）、お仕事にチャレンジ	総合的な学習、学活
全校	サン・サンロードクリーン作戦、三世代ふれあい活動 お話の会、一人一鉢運動、全校道徳	国語、生活、図工、家庭、 総合的な学習、特活、道徳

②各活動の指導計画（例 第1学年 和牛農家の訪問）

活動の名称	内 容（道徳はねらい）	教育課程上の位置づけ	単位時間数
うしをみにいこう	牛を見学し、絵や粘土で分かったことを表す。	生 活	7
わたしは もんしろちょう	身近な自然に親しみ、動植物に優しい気持ちで接し ようとする心情を育てる。	道 徳	1
うしのはっぴょうかい をしよう	牛のすばらしいところを発表する会を開く。園児に 牛の発表をきいてもらう。	生 活	6
うみがめの赤ちゃん	生きることを喜び、生命を大切にしている心情を育てる。	道 徳	1
うしをみにいこう	再度牛の見学に行き、園児から出た疑問を解決する。	生 活	4

2 活動の実際

(1) 全校での活動例

全校道徳「いのちの授業～見えないものの中に大切なものがある～」

○ 事前指導

校長が全校読書で聖路加病院理事長日野原重明先生の著書を読み聞かせ、経歴について簡単に紹介した。全校道徳までに各学年道徳の時間に「命」の授業を行った。



○ 活動の展開

1年生から6年生までが授業を受けた。「命はどこにあるのでしょうか」の質問から始まり、心臓の位置や大きさを学習した後、「命とは何か」について考えた。「命とは、自分が使える時間である」と言う話の後、「自分の時間を大切にしているか」しかも、「自分のためだけに使うのではなく、他の人にも使うことがこれからの君たちには重要である」とおっしゃった。低学年の児童も話の奥深さや日野原先生の若さと人柄に圧倒され時間を忘れて聞き入っていた。

○ 事後指導

全校で感想を書き、道徳や学活で深めていった。書いたものを昼の放送「作文週間」で紹介した。下学年は印象に残ったことばが中心であったが、上学年は話の中心は何か、時間を大切にするためにはこれからどんなことに気をつけて生活をしたいかなどが記入してあった。周りの人の感想を聞くことで生活にもそれを生かそうとする児童が増え、委員会活動や縦割り掃除、係活動などにより主体的に取り組む姿を目にするようになった。

特に6年生では、自分たちが全校のために行っている活動が日野原先生のおっしゃった「時間を他の人のためにも～」に匹敵していることを道徳で取り上げた。「よりよく生きていくことが命を大切にしていくこと」に焦点化して子どもたちが最上級生として努力してきたことを認め、中学校へ向けて更なる飛躍への意欲を高めたいと考えたからである。

(2) 各学年での活動例 和牛農家の訪問（第1学年の活動）

○ 事前指導

見学前に、「牛の秘密を探ろう」「1回目に発見できなかった秘密を探そう」と課題の共有化を図り、メモを取ることが難しい1年生なので「心のカメラにしっかり写そう」「聞いたことはしっかり覚えて帰ろう」を合言葉に出かけた。また、湯野幼稚園出身の子どもたちに昨年度一緒に見学したときのことを想起させ、他園出身児童に話して聞かせる場も設定した。



○ 活動の展開

子どもたちは笑顔で牛にえさをやり、牛舎においてあるものや牛の生態について質問をした。帰校後、観察カードに自分が見つけた秘密を記入させた。文章がまだ十分書けないので、質問したことや答えてくださったことを担任が子どもの発表から聞き取って大判用紙にまとめ掲示して残し、振り返りに生かしていった。また、粘土で牛を作る場も設定した。身体の特徴を一生懸命捉えようと手を動かしていたし、教え合う姿も見られ、体験を共有することで互いが高まっていると感じた。絵とは異なる身体の厚みの発見に戸惑いもあったが、「みんなの身体も横から見ると同じ」と話すと納得していた。作る中で爪の形やしっぽの長さ・形などへの疑問が湧き質問しあっていたが、確かなことは思い出せないので次回に結論を出すことにした。2回目の見学では、一緒に出かけた年長児に1回目で知ったことを教えたり、新たなる疑問を和牛農家の方に伝えたりしていた。年長児が質問するときには、傍で見守り言葉を添えている姿に「縦のつながり」を感じずにはおられなかった。



○ 事後指導

自分が調べた牛の秘密をまとめて学級の友達と園児に発表することにした。紙にまとめたものを見ながら発表するのではなく、牛の真似や粘土や写真などを提示して友達のひき付ける方法を工夫するように投げかけた。糞の大きさや、大人と子どもとの角の大きさの違いがはっきりするよう提示物にこだわりを持ち、「牛の固有性」を示そうとしていた。それらの成果が出たのか、聞いている者は提示物に興味を持ち話に引き込まれていったし、友達の提示物や原稿をすでに見聞きしているのに初めて聞いたかのように驚き、質問を繰り返した。更に自分の分からないことは絶対尋ねようとしている姿や、友達に繰り返し説明して納得してもらおうという「こだわり」や、できた「喜び」が「知」の総合化につながっていた。



さらに、学校の飼育係である4年生が行っている「生き物ふれあいコーナー」に出かけ生き物とふれあうだけでなく、質問状を出して4年生と交流することを通して、生きているものを世話する大変さや喜びが少しずつ分かってきた。また、事後のお礼として学習発表会やありがとうパーティなどに和牛農家の方を招待して感謝の気持ちを伝えた。

3 体験活動の実施体制

○ 学校支援委員会

昨年度も実施した地域協議会をさらに前進させた形で学校支援委員会を組織し、地域力の参画を推進させ連携の強化を図っている。そこでふるさとを練習場とした体験活動の効果的な内容や方法を協議し、それをもとに全教職員が校内研修を核に研究推進している。構成

員は、コミュニティ会長、老人クラブ会長、民生委員長、社会福祉協議会長、公民館長、学校評議員、校長、教頭、各主任（教務、研修、生徒指導）である。

○ 配慮事項等

- ・ 生き物とふれあった後には、手洗いうがいを十分行わせる。
- ・ 学校外に出るときは、見守り隊に依頼し安全確保の協力をお願いしている。
- ・ 家族からの手紙や家族の写真を生かすことについては、各家庭個別の配慮を行う。

4 体験活動の評価の工夫と指導の改善

- ・ 体験後、学んだことをねらいに沿って表現（文章、絵、粘土、写真など）させることによって評価し、ポートフォリオ的に次回の活動につなげていくようにしている。学んだことが次にどの学習活動につながっていくのか。以前学習したことのどこと連動性をもっているのかを教師自身が常に意識するようにしている。また、総合単元的な学習としての授業も仕組み、点と点の活動をつなげるために道德の時間や心のノートを活用するようにしている。
- ・ 体験から得られた価値を道德の時間に取り上げ、「補充・深化・統合」することにより、活動の価値を高め、それぞれの活動に関連性をもたせて生かし高めるよう改善している。

5 活動の成果と課題

○ 成果

- ・ 体験後、学年に応じた「振り返り」が「ことば」を通してなされることで価値ある体験にまで高められ、新たなめあてが生み出され「知」の総合化が図られている。価値ある「ことば」の蓄積がなされ、授業中にそれらの言葉を意識せずに使ったり、「あのときこんなことを言っていたよ」などと言葉にこだわりをもった発言をしたりする姿がいろいろな場で見られている。
- ・ 活動を引き継ぐ場や交流の場を教育課程上に位置付けることで子どもの中に次の活動の見通しと期待が生み出されている。児童自身がたくさんの活動を目の当たりしているので、「来年になったらこうしよう」と主体的に課題設定するだけでなく、「去年のものにこれを付け加えたらどうだろう」などと、少しずつ高まりをもって行うようになっている。
- ・ 学び合う姿・遊ぶ姿・働く姿等になかまへの温かい思いの伝わる言動や寒い朝も登校するや否や飼育小屋の清掃や水かえに取りかかり、生き物を愛おしむ姿等が日々見られている。

○ 課題

- ・ 過去の学習や体験を踏まえて学習計画が立てられるように、命の大切さを学ばせるための視点の系統性を更に押さえながら主な体験を構造化し、学年の系統性や連続性を踏まえた体験活動のねらいを明確にする。
- ・ 児童が命の大切さを感じ取ったとは、どのような状態を見ればいいのかを更に明らかにし、評価の方法を探っていきたい。
- ・ ふるさとへの愛着を生むよう、湯野の自然を生かした体験活動の開発を試みたい。